



Title	アラン・シリトー( )-その反抗の姿勢-
Author(s)	長岩, 寛
Citation	明治大学教養論集, 39: 51-63
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/8917">http://hdl.handle.net/10291/8917</a>
Rights	
Issue Date	1967-01
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

# アラン・シリトー（I）

—その反抗の姿勢—

長 岩 寛

You cannot win, but you can fight

## I

John Wain の *Hurry on Down* (1953), Kingsley Amis の *Lucky Jim* (1954), Iris Murdoch の *Under the Net* (1954) と殆んど同時といってもいい位に相次いで発表されたイギリスの若手作家の第一作を並べてみると、これらの作品がイギリス50年代を代表する小説とはいえないにしても、50年代のイギリス小説の大きな動きをあらわす作品であると考えられるであろう。そして、これに小説ではないが John Osborne の *Look Back in Anger* (1956), 更に John Brain の *Room at the Top* (1957) と Alan Sillitoe の *Saturday Night and Sunday Morning* (1958) の2つの小説を加えるならば、こういった一連の作品がイギリス50年代後半のいわゆる “The Movement” を語るに十分な材料を提供してくれることは否定できないであろう。

ジャーナリズムによって造りあげられ、いまはもう、当人たちからも批評家からも毛嫌いされている “The Angry Young Men” なる肩書きではあったが、こうした新しい文学の動き、いってみれば一種のブームを語ろうとするときに、ジャーナリズムが何かしら彼らの名称を欲したのも無理からぬことではあった。

「(1) この言葉はぼくが生命を賭けている芸術のことについては何も知らず、またそれに何らの配慮も払おうとしないジャーナリストたちがデッチ上げたものであること。(2) 真剣な意見を持ち、またその意見について純粋にまじめな態度をとることができる人たちにとっては、この言葉は障害となること。(3) そして、すぐ金になるという利点はあっても、ぼくはそういった型にはめられるのは嫌いである」<sup>(1)</sup> とむきになって抗議する John Wain では

あるが、いまいった作家たちが明らかにそれぞれ方法の違いはあるけれども、何らかのかたちで Establishment (体制) 側への抗議または不満をぶちまけたことは確かであり、ニュアンスの違いはあっても、その声は一つの大きな叫び声となり、そのことが彼等の小説の版を重ねさせる原因の一つになったことは否定できないのである。

なかでも、John Wain, Kingsley Amis, Iris Murdoch の3人の大学出身の作家たちはつぎつぎと小説を発表し、再び “The New University Wits”<sup>(2)</sup> なる肩書きを与えられて、依然として英米の批評界を賑わすことになった。3人の第一作はともに有名な主人公をつくり出し、(*Hurry on Down*-Charles Lumley, *Lucky Jim*-Jim Dixon, *Under the Net*-James Donague) 特に前の2人には共通なものも認められるところから Jim-Lumley 的人物なる言葉も生れたのである。Amis の Jim Dixon は出版と同時に Walter Allen によって “A new hero has risen among us.”<sup>(3)</sup> と書かれ、Salinger の *The Catcher in the Rye* の Holden Caulfield がアメリカの若き世代の一つの象徴であると同様に Jim もイギリスの若い世代の代表格として、「世代と世代の間の絶えざるたたかいの中で、一つの世代を代表する主人公」<sup>(4)</sup> として大きく取りあげられたことについては、多くの異論はあったにしても、Jim Dixon が新しいタイプの主人公であったし、その出現は John Osborne の Jimmy Porter ほどではないにしても、沈滞気味の50年代イギリス小説界に一石を投じたものであるといえよう。

Jim は地方大学の若い講師で、歴史を教えているが、1年たったらくびになるのではないかという心配がある。主任教授の Weltch は悪意のある人物ではないのだが、彼や大学全部の雰囲気嫌で、その仕事も怠り勝ちである。そういったことで Jim は滑稽な失敗ばかりくりかえしている。2人の女の間にはさまって決断がつかかねているし、教授の息子と喧嘩したり、深酒したりもする。そのあげく、自分の地位を決定する研究発表の場で、しどろもどろになって職を失うことになる。こういった人物で、彼は自分の意志とは異なる環境

に翻弄されて、自分の行動の基準を失ってしまっている。しかし小説の後半では、彼はこういった硬化した生活から抜け出して変化を求めようとする。そこに新しい世界が待っているような気がするのである。失職が確実になって、この無意味な生活に別れをつけることを決心したそのとき幸運が舞い込んできて、恋人と共にロンドンで新しい割のいい仕事が見つかるといった結末である。

古いしきたりをもった大学への批判が、こうして **Oxford** 出身の作家によって書かれる。大学を出たおかげで、自分の生れた階級にも属さないし、さりとて現在の身分にも安住できない、といった宙ぶらりんの状態にあって、喜劇的な **farce** の手法によって自分の属する社会を諷刺する、いわば戯作的な手法ではあっても、そこには大学や階級を打破って、自分の新しい生活範囲を拡大してゆこうとする姿勢がみられる。こうした自分の破滅を目の前にして、自分が置かれている位置をはっきりたしかめ、自己の展望を積極的に新しい世界で拡大しようとする **Jim** の姿勢は、たしかにイギリス文学には新しいタイプであろう。そういったところに **Jim Dixon** が「新しい主人公」であり、またそこに新しい **Movement** を見るのである。だがここで私は **Kingsley Amis** をはじめ、上にあげた作家たちを論じようとするのではない。彼等の描く人物とはまた異った **Alan Sillitoe** の主人公たちを説明する上で、かつては “**The Angry Young Men**” と称された作家の作品について少しばかり触れておく必要があったからである。

## II

**Alan Sillitoe** の *Saturday Night and Sunday Morning* はさきに述べた50年代後半の状況の中で考えてみると、きわめて興味ある作品の出現であるといえよう。この作品の **Allen** 版のカバーに記された著者紹介のことばに「著者は自分を知識階級であると考えてはいない点で、他の労働階級出身の多くの作家たちと違っている。それ故に彼の作品にはさわやかな独創性 (**refreshing originality**) がある」と書いてある。私はこの言葉を単なる宣伝文句としてで

はなく、そのまま受けとめて、シリトーの作品のなかにそれを探ってみたいと思う。

*Saturday Night and Sunday Morning* の前年に出版された John Brain の *Room at the Top* は作者が労働階級の出身であり、大学も出ていないところから、純粋な労働階級の小説として、大きく取り上げられ、主人公 Joe Lampton の年上の女と億万長者の娘との間にはさまれた愛の苦しみと、上の階級への脱出の物語りは、あまりにも作者自身の“脱出”をはっきり見せつけられ、事実 John Brain 自身が「怒れる若者の一人」と自称しながらも、あまりにも commit しすぎた彼の態度に、その「怒り」の声は弱まり、*Room at the Top* の続篇として書かれた *Life at the Top* (1962) では、脱出に成功した Joe Lumptom の物語りには生気が失われてしまったことがよくその事情を物語っているような気がしてならないのである。このことは、「怒り」という「体制側」への激しい批判の声としてではなく、新しい文学の“Movement”として John Wain や Kingsley Amis のその後の作品に対する私の素朴な不満と共通するものである。こういった意味でこれから語ろうとする Sillitoe の「さわやかな独創性」が私を心を魅きつけるのである。

イギリス 50 年代の労働者の姿を見事に描き出した Sillitoe の *Saturday Night and Sunday Morning* という表現を用いるならば、何を根拠に労働者の姿をとらえるのかと、と言われるかも知れない。その意味では名著と評判の高い、Richard Hoggart の *Uses of Literacy* からいくつかの説明を借りねばならない。

「われわれ」と“彼等（又は奴ら）”とはっきり区別する世界にしがみついているのが大抵の労働階級の主要な特徴である」<sup>(5)</sup> そして彼等の政治問題に対する態度は「彼等の限られたリアリズムの範囲内では、『政治問題ではおれたちには未来がない』ということを感じとっているし、また、『政治なんて、決しておれたちの為にはならない』と口にする」そして Hoggart は労働者の姿が極めて cheerful なものであるといい、「彼等の快活さは、自分で自分を



すこし赤がかっているんじゃないかと仲間と言われて、「いっておくが、おれはコミュニストじゃない。でも彼等は嫌いじゃない。彼等は議会にいる保守党の豚どもとは違うし、労働党の搾取家たちとも違うからな」<sup>(8)</sup> といい、彼等を支持するのは、彼等が少数者であり、弱者であるからだと言う。もし彼等が政府にはいたりしたら、問題は別だと割切っているのである。こうした言葉からもわかるように、Arthur に愛国心などないのは当然のこと、特定の組織を支持することもない。政治に関しても懐疑的である彼の態度はアナーキスト的にも見える。しかし「おれは運がよすぎるぐらいいいんだ。だからいまのうちに出来るだけ楽しんでおこう」<sup>(9)</sup> と考える Arthur の態度には非情なまでの nonconformity がみられるのである。

この Arthur は同僚の妻 Brenda と関係し、彼女が妊娠したとき、11人も子供を生んだ叔母の Ada にすべてを打ちあけて処置を頼み込む。この Ada に対する信頼感と、子を墮すときの Brenda の苦しみを目の前にして彼女に対する憐みの気持には、あくまでもこの2人を「われわれ」と感じ、彼の「やつら」に対する感情の烈しさとはまるで異ったものを示しているのである。この気持は後で触れる *The Loneliness of a Long-Distance Runner* の中に更にはっきりした形で現われている。ともかくここにも本能的ともいえる“好き、嫌い”の感情がむき出しに表現されている。これはまた同じ労働者でありながら職場の主任であるに Bobboe に対する Arthur の反抗的態度ともつながってくる。つまり Bobboe は責任者であり、Arthur はあくまでも責任者の立場に立つことを拒否し、責任者はどんな身分であろうとも、“やつら”なのだ。これもまた *Loneliess of a Long-Distance Runner* で発展して描かれることになるのだが、こうした Arthur の姿勢が Sillitoe の作品の魅力なのである。

Brenda の苦しみをみかねて Arthur は叔母の家を飛出すが、その足で pub に立寄り、今度は Brenda の妹の Winnie と会い、彼女と関係する。こうした Arthur の不道德な態度を Sillitoe は突き離して見事に描き切っている。結局は Winnie の夫とその友人につかまり、さんざんぐられた上に、2人の女を同時に失ってしまう。

「世の中には安全なんていえるところはないんだ。いまになってはじめて、そんなところはこれまでもなかったし、またこれからもないだろうということがはっきりとわかった。つまり、違っているのは、いままではこのことは生れつきもっている無意識の状態であったものが、いまはっきりと事実としてわかったということ。つまり暗い森のどまん中の洞窟に住んでいても、決して安全じゃない。遠く離れてしまうことはできないんだ。いつも片目だけはあけて、すぐ手の届くところにとがった石を積んで眠らねばならないんだ」<sup>(10)</sup> と考えながら、危機の意識を体験からすくい取ってゆこうとする。だが **Arthur** はそうした危機感に対しても、やはりこの生活は悪くない、**Brenda** と **Winnie** は失ってしまったけれども、他の可能性があると考えながら眠ってしまう。こういった「安全はない」場所で、自分の位置をしっかりと確めた上で態度を決定する姿勢は **Hoggart** の書く労働者の姿であると同時に、**Sillitoe** が考える反逆者の姿勢でもある。

「いちど反抗したら、いつまでも反逆者だ。そうならざるを得ないのだ。これは否定できないことだ。そして、われわれを押えつけようとしても無駄だということを“奴ら”に見せつけてやるためには反逆することが一番だ」<sup>(11)</sup> **Arthur** は現状での自分の取るべき態度をはっきりと把んでいるのである。そして再び **Doreen** という若い恋人を得て、彼女との結婚を決心する **Arthur** であったが、その時の **Arthur** を **Sillitoe** はこう描いている。

「(勿論このこと自体には甘美な気持がつきまとうものだが) もし彼がこの愛の法則に対して反逆を止めたとしても、また、この愛の法則を闘いの法則と同化させていったとしても、まだそこには彼の白いはだをした頑丈な肩をおっつけてゆかねばならない巨大な政治の力があつたし、無視しなければならぬ故に、打破らねばならない数多くの法律があつた。その上、だれにとっても自分自身が敵なのだ。そして、こういった闘ってゆくという条件のみが、自分を納得させることができる唯一のものである。そしてこの場合、その武器として役に立つと思われるものはただ“ずるさ”だけなのだ。それもここそとやる“ずるさ”じゃない。そんなものなら死ぬよりも悪いもんだ。そんなのじゃな



くて、働くものの堂々として、元気激刺たる“ずるさ”なのだ」<sup>(12)</sup> こうして Sillitoe は Arthur の姿勢を更にはっきりさせてゆくのである。自分に適しい恋人を得て、彼が反抗をやめるのではなく、新しく展開した局面に再び腰をすえて、“体制”へ反抗の身構えをする激刺とした構えである。勿論彼はその反抗が勝利に終るとは思っていない。徹底的に反抗することに自分の生活を見出している男である。そして最後の場面で Arthur はひとりで魚釣りに出かける。この田舎に魚釣りに出かけることだけが、彼にとっては一時的ではあるが闘いの場から脱出することであり、いかにも本能的な生活に思想を与えてくれる場でもある。釣糸をたれながら彼はこう考える。

「大抵の人間は魚みたいなものだ。ひとりでいることは何ていいんだろうと考えながら勝手なことをやり、誰にも気がねせず自由に泳ぎ廻っている。その時、パシッ！——大きな釣針がその口にくい込んでつかまってしまう。……もし目の前にぶら下っている餌を一生拒否しつづけたならば、全く生きていないことと同じになってしまうだろう。何の変化も起らないだろうし、闘う相手もなくなってしまうだろう。勿論この餌という代物は厄介千万なものなのだが、いつまでもそれを無視することはできないものなのだ」<sup>(13)</sup> つまり今のよ  
うな社会にあっては生れると同時に人間は釣られてしまっているのだ。そして労働者にとっては生きるということ自体が自分を釣っている者に対する闘いなのだ。闘いは苦しいものではあろうけれども——小説はここに至って、はじめに引用した Hoggart の労働者の姿を超えて、作者 Sillitoe によって描き出された hero になる。Arthur は今までのイギリス小説にあらわれた労働階級の姿とはかなり異った新しい型の間人として、福祉国家という看板の前に立ちほだかる大きな人物となっている。あくまでも非情な nonconformism、責任者の立場には絶対に立たない Arthur の姿を、抑制した密度の高い文章で明確に描き切ったこの作品には真に“さわやかな originality”をみるのである。そして Arthur の姿勢に、更にはっきりした反抗の姿勢を示したのが *Loneliness of a Long-Distance Runner* である。

### III

*Saturday Night and Sunday Morning* の最後で Arthur は「ずるさを武器として“やつら”に戦い挑む」と考えたが、その闘いがこの *Loneliness of a Long-Distance Runner* (1959)<sup>(14)</sup> である。わずか60頁にも満たないこの短篇の中に書かれた激しい反逆の言葉は、巨大な怪物とでも称すべきイギリスの体制への Sillitoe の体当りの宣戦布告であるといえることができるであろう。

パン屋へ仲間と押込んで金庫を盗み出し、櫃の中にかくした札束が絶対に見つかりつてなすと信じ、家にやってきた刑事に対してさんざん悪態をついているところに雨が激しくなり、札束はものの見事に刑事の足もとに押し流される——こうして再び感化院送りとなった Smith が、足が速いところからクロス・カントリーの選手にされ、毎朝5時に起こされてただひとり早朝の野原を走りつづける、その折の回想を描きながら、小説は最後の *Borstal Blue Ribbon Prize Cup For Long Distance Cross Country Running* なる長ったらしい名前の大会で、他の感化院の選手に院長の目の前で一等を譲り、カップを手に威張ろうと思っている彼の鼻をあかし、また床ふきの労役に服しながら反省の色を示すどころか、次の大計画を考える——という非行少年 Smith の姿を描き、作者自身その計画の成功など全く信じはかない、この主人公をつき離し、計算し尽した作者と主人公との見事な距離と、コントロールされた巧みな話術は特筆に価するであろう。

「人生で物をいうのはずるさだ。そのずるさも、できるだけ抜け目なく使わなきゃだめだ。はっきり言おう。“あいつら”もずるい、おれも負けずにずるい。………確かなのは、どいつもこいもずるい、ということだ。だからわれわれの間には、これっぱしの愛もありはしない」<sup>(15)</sup> まず冒頭から、こうした“Us”と“They”との明確な区別、そして、そのずるさには Arthur よりも更に磨きがかけられて、Arthur が最後に考えた姿勢を定着させ、その上に立って

Smith は行動をはじめると考えることができる。「そりゃ、われわれはどっちもずるい。だけどおれの方がもっとずるい。82才でおた箱でおだぶつかも知らないが、しまいにはおれの方が勝つつもりだ。なぜならおれは奴らなんかよりはるかに人生を華やかに太く生きるつもりだからな」<sup>(16)</sup> と Smith は今の状態で自分の勝利を信じているのである。こうした Smith をみると、やはりこういう描写が出来るのは労働階級の筆でなければならないといった印象が強い。Smith は更に続ける。「誰が何と言おうとかまわさない。ともかくこれは事実で、誰も否定できないことだ。奴(院長)におれが話しかけ、おれが奴の軍人づらを覗きこむとき、おれは生きて居り、奴は死んでいることがはっきりとわかるのだ」<sup>(17)</sup> だからどう考えてもいまの生活の方がいい。いまの生活でなければ“奴ら”に闘いを挑むことはできなくなる。「おれには自分の敵がどいつであり、闘いとは何ものであるかを知っている。落したいなら原爆でも何でもジャカスカ落すがいい——おれはそんなのを戦争とは呼ばないし、軍服を着る気などさらさらしない。おれはもっと違った戦争をやっているのだ。奴らは子供のお遊戯と考えるだろうがね。奴らの考えている戦争は自殺だ……政府の戦争はおれの戦争じゃない。おれには何の関係もない」<sup>(18)</sup> 自分に関係があるのは自分の戦いだけである。これは Arthur の考える、人間は生れたときから釣られているのだから、生きるということは釣られた状態に於ける闘いだということに一致すると思われる。そして、Smith がこの闘いをどう考えているかということ; 相手は感化院や刑務所や絞首台の縄というナイフをもっているが、こちらにはそんなものはないから素手でがむしゃらに飛びかかってゆくだけだ。そして相手のナイフを叩き落すだけだ、と。こうして Sillitoe は Smith の非行ないしは道德感をそのまま反抗に置きかえているのである。

G. S. Fraser は Sillitoe のこの作品を、「彼の労働階級の生活に対する見方は古典的であり、悲劇的である。決して勝つことはできないが闘うことはできるのである。彼のどの小説にも一筋の悲しい反抗といったものが流れている」<sup>(19)</sup> と書いている。確かに、Smith が相手はナイフを持ち、こちらは素手

でがむしゃらに闘いを挑むと考えるとき、彼はその意味では自分の勝利を確信しているわけではなく、いわば悲愴な決意のもとにあくまでも闘いを挑むといったものである。すでに刑事につかまって感化院にいること自体が、ナイフを手にした大きな敵との闘いである筈だ。彼の勝利はたくましく生きのびることに於て達せられるのである。いってみれば反逆を貫ぬくことが彼の勝利である。しかしこの作品には悲劇的なものはない。Sillitoe がつき離して描く Smith の反逆は痛快ですらある。Fraser の言葉を裏付けるものは、この短篇集におさめられた *On Saturday Afternoon* であろう。この9頁余りの短篇はすぐれた作品である。

子供が近所の男が自殺するのをじっと見つめている。「なぜ首を吊るのか」ときけば、「そうしたいからだ」と言う。そして口笛を吹きながら準備にとりかかる。電灯のコードに綱をつけて首を吊るが、失敗する。警官がやって来て「5年の刑になる」といえば、「ただ首を吊りたかっただけだ。自分の生命じゃないか」と答える。しかし違法だということで怪我をしたその男は病院へ収容される。男はすきを見て病院の6階の窓から飛び下りて死ぬ。私なる子供はいくらか大きくなって、あのとき自分が映画に行かなくてこの場に立会えたこと、そしてその男が警官や他の全ての者に対して、自分の生命であることを立証したことをよろこびながらも、「おれは自殺なんかしないだろう、105才になって頭がぼけてくるまで生きてやる。それから、いまいるところにまだ残っていたいんだから力の限りわめきながら死んでやる」<sup>(20)</sup> という少年の言葉で終わっている。最後の言葉を抜きにして、こうした自殺する権利すらも奪われた男のとらえられた状況の子供の眼を通して非情なまでに冷たく描く方法は、同じ短篇集の中の *Uncle Ernest* にも見られ、更に *The Fishing-Boat Picture* では自分を裏切り去っていった妻に援助を与え、その妻が最後に交通事故で死んだとき、「おれは生れたときから死んでいるんだ。みんなもそうだ。ただそれに気づかないだけなんだ」<sup>(21)</sup> と考える男の姿には一抹の悲劇的な感じはある。しかし作者は子供の無関心な非情な眼を通して、または冷たくつき離れた描写によって、こういった人間の、労働者の姿を何らの同情も共感も混えずに

透徹した手法で書き切って居り、*On Saturday Afternoon* の子供のように「おれは絶対にそうはならない」と叫ばせることによって、彼等に痛烈な批判を浴せているのである。確かに勝目のない闘いであろう。しかしあくまでも闘おうというこの決意こそ、これまでのイギリス小説には稀な、そして50年代の新しい作家たちの誰も描かなかったシリトー独自のものといえよう。

もう一度 *Loneliness of a Long-Distance Runner* へ戻ると、Smith があくまでも自分の nonconformism を貫ぬく説明として、彼は“誠実さ” (honesty) という言葉をしばしば口にするのである。最後の競走に敗れるところで、「あの最後の百ヤードは走ってやらないぞ、たとえ草の上にとっかとあぐらをかいて院長やあごなしのお偉方がおれをひっぱり起こし、ゴールまで運ぼうとしたってだ。それは規則違反だから、奴らがそんなことをする筈がない、(おれだったらやるだろうが) 規則を破るほど気の利いた奴らじゃないんだから——規則といっても、どうせ奴らが勝手にこさえやがったものなんだが。いや、おれはどんなことがあっても、誠実ということがどんなものか奴らに見せつけてやるんだ。もし奴や奴らにそれがわかったら、奴らはみんなおれの側につくことになり、これは不可能なことだからな。ちきしょう、おれはこの決心を貫いてやるぞ、おやじが苦しみをこらえて、医者連中を階段の下へ蹴落したときみたいに……」<sup>(22)</sup> こうして、奴らとは全く異質の honesty にしがみつき、明らかに敵が造り上げた体制への拒絶の態度を示している。Smith の反抗はこうしたすさまじいまでの激しい拒絶の姿勢なのである。そしてこの“誠実さ”は同じ階級の父親に対する共感となり、また苦しみながら死んでいった父の拒絶とつながってくる。シリトーの反抗の姿勢は、これまでに取り上げてきた作品に関する限り、あくまでも労働者の立場にあって、体制側へ commit することへの烈しい拒絶であるということができよう。

\*

\*

\*

Alan Sillitoe はこれまでに *The General* (1960), *Key to the Door* (1961),

*The Death of William Posters* (1956) という小説と *The Ragman's Daughter* (1963) をタイトル・ストーリーとする短篇集、及び *Road to Volgograd* (1964) というソビエト旅行記のほかに2冊の詩集を出版している。この小論ではこれらの作品には一切触れなかった。機会を改めて特に上記3冊の小説について書く積りであるが、ともかく Sillitoe の反抗の姿勢について書くときに、この3冊は触れることをためらわせるものがあった。つまり3冊の小説は小論で取扱ったものとは可成り異質のものを私に感じさせたからである。

#### 註

- (1) John Wain: *Sprightly Running* (Macmillan) p. 225
- (2) “The New University Wits”, William Van O’Conner の評論集である。
- (3) Walter Allen: *Review of Lucky Jim* (New Statesman and Nation, January 30, 1954)
- (4) Walter Allen: *Tradition and Dream* (Pelican Books) p. 301
- (5) Richard Hoggart: *The Uses of Literacy* (Pelican Books) p. 102
- (6) *ibid.*, p.p. 132-133
- (7) Alan Sillitoe: *Saturday Night and Sunday Morning* (W. H. Allen) p. 26
- (8) *ibid.*, p.p. 33-34
- (9) *ibid.*, p. 35
- (10) *ibid.*, p. 177
- (11) *ibid.*, p. 196
- (12) *ibid.*, p. 197
- (13) *ibid.*, p. 211
- (14) この title story ほか8篇をおさめた短篇集である。
- (15) Alan Sillitoe: *The Loneliness of a Long-Distance Runner* (W. H. Allen) p.p. 7-8
- (16) *ibid.*, p. 13
- (17) *ibid.*, p. 14
- (18) *ibid.*, p.p. 16-17
- (19) G. S Fraser: *The Modern Writer and His World* (Pelican Books) p. 179
- (20) *op. cit.*, (*On Saturday Afternoon*) p. 127
- (21) *ibid.*, (*The Fishing-Boat Picture*) p. 99
- (22) *ibid.*, p. 51

\* なお *The Loneliness of a Long-Distance Runner* の訳は河野一郎氏のものを参照させていただいた。